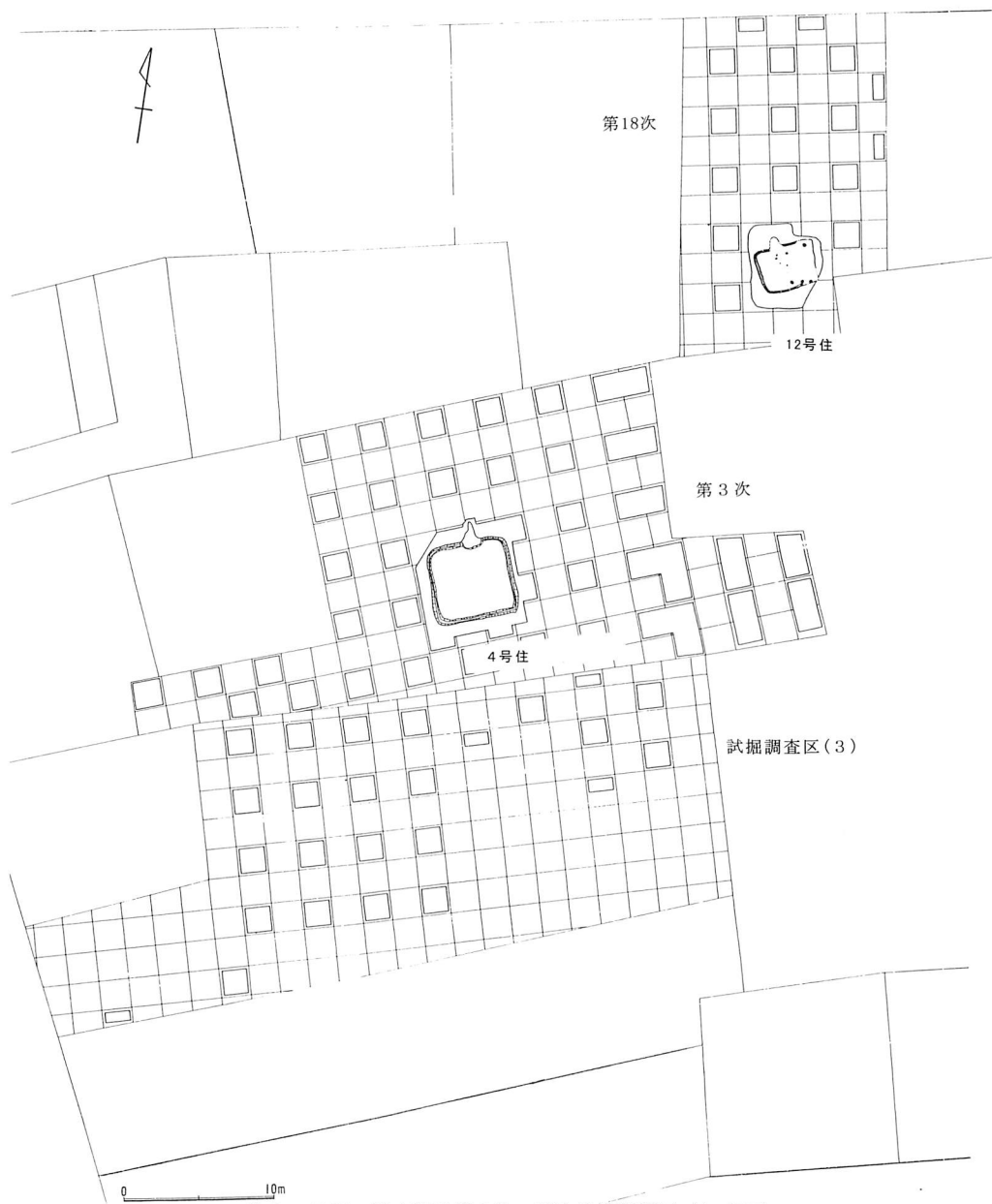


## Ⅱ 考 古



第8-5図 松山遺跡第3次・18次遺構配置図〈1/500〉

## Ⅱ 考 古

属するものと考えられる。

### 松山遺跡第16次10号住居跡（第8－11図）

南側は調査区外にあたり、北側約1／3のみの調査となった。また住居の東側は攪乱を受けている。東西は5 m60で正方形になると思われる。カマドは北側に設けられている。柱穴は1本のみ確認されている。カマド付近を中心に土師器、須恵器の破片が出土している。住居の年代は出土土器から8世紀第4四半期になると思われる（文献58）。

出土遺物（第8－11図）は、須恵器蓋（1）、須恵器坏（2～6）、土師器甕口縁部破片（7）である。

### 松山遺跡第17次11号住居跡（第8－8図）

攪乱のため正確な規模は不明だが、柱穴の配置から約6 m四方であると思われる。北側壁の一部と柱穴4本が確認された。柱穴の間隔は東西で3 m、南北で2 m70である。出土遺物は他地域で生産されたと思われる黒色処理が施された土師器坏や土師器、須恵器の破片である。住居の時期は7世紀第4四半期と思われる（文献58）。

### 松山遺跡第18次12号住居跡（第8－5図）

東西4 m、南北3 m20の長方形。保存状態が悪く、東側はかろうじて住居の範囲が分かる程度であった。周溝はおそらく全周していたものと推察される。カマドは北壁の西よりに設置されていた。白色針状物質を含む須恵器坏や土師器甕、須恵器甕などの破片が出土しており、その年代は8世紀第4四半期頃とみられる（文献58・本書）。

### 松山遺跡第19次13号住居跡（第8－12図）

ゴボウ耕作による攪乱を受けている。東西4 m50、南北3 mの長方形。周溝は北側東半分を除き、全周している。北東隅に直径60 cm程の貯蔵穴を持つ。床面は南東部分が比較的良く踏み固められている。須恵器坏・蓋、土師器甕の破片が覆土中から出土している。住居の時期は出土土器の年代から9世紀第1四半期と考えられる（文献59）。

### 松山遺跡第19次14号住居跡（第8－12図）

東西4 m50、南北5 mの長方形。ゴボウ耕作による攪乱が激しい。周溝はカマド部分を除き全周。北側と東側にカマドがあり、東カマド→北カマドの